

VI かかわりの困難な子どもに対して

(1) 里親家庭への適応段階と適切なかかわり方

子どもたちの心は複雑です。特に実親から引き離されねばならなかった子どもたちの心には、大人に対する不信と愛されたいという渴望とが入り交じっています。里親と委託された子ども、すなわち育てる大人と育てられる子どもとの間に信頼関係が築かれるまでには、様々な困難を双方が乗り越えなければなりません。それは、凄まじい闘いになります。

もちろんその経過は、一人ひとりの子どもによって違います。その子どもの年齢や性格、実親からどのように育てられていたのか、そしてその親とどのように別れねばならなかったのか、施設での生活がどんなものであったのか、よく担当の保育士に手をかけさせた子どもだったのか、逆にあまり手をわずらわせない方だったのか、元気な目立つ子どもだったのか、おとなしくて集団の中に埋もれてしまっていた子どもなのか、誰かその子を特別にかわいがってくれる人がいたのかどうか、その子どもの発達状況や要求の表現能力等々によって違います。また、受け止める里親側の状況、すなわち里親の年齢や子ども観、子どもへの期待、実子がいるのかどうか等によって違ってくるでしょう。

それでも、多くの子どもたちが同じような行動をとります。そして、その行動にはそれぞれに意味があるのです。それをどのように理解し、受け止めていくのが、その子どもとの信頼関係を築く上で、とても大事なことです。里親にとってはかなり大変で、苦痛の伴うものかもしれませんが、子どもは自分の身に起きた突然の環境の変化に、大きな不安と不信を抱いているのです。委託された子どもが里親家庭になじみ、里親を信頼できるようになるのに、半年から1年ぐらいの時間が必要です。もちろん、この期間もその子どもの状況と里親の関わり方によって、短くも長くもなるのですが、幼児から小学校の低学年ぐらいの子どもの平均と考えてください。その期間は、①見せかけの時期、②試しの時期、③里親と委託された子どもの関係の成立後という3段階に分けられます。

① 見せかけの時期

大人もそうですが、特に子どもは環境が変化することに大きな不安を感じています。施設から里親家庭に引き取られると、全く生活の仕方が違いますから、少々事前に里親となじむ期間があったり、そこに外泊できたりしていても、いざ生活が始まってみるとなじみの薄い場所とまだ始まったばかりの人間関係に緊張しています。だからとても「お利口さん」になって、しばらく周りの様子や里親の出方を見てみようとするのです。施設の生活が長かった子どもは、決まった時間に起きて、決まった時間になると寝てくれます。集団で暮らすために作られた規則やスケジュールに身体が

なじんでいるということもありますし、決められた通りにしていると、何事も無事に済むことを知っています。出された食事をきれいに残さず食べ、「いただきます」や「ごちそうさま」と大きな声でいいます。決まった時間にテレビを見たり、結構あいさつもきちんとできたりします。通常の年齢相応のことや、どうかすると年齢以上のことが、言われなくてもできるかもしれません。

しかし、里親はこれで気をよくしてしまっただけではいけません。どのみち、この状態は短ければ2～3日、長くても1週間ぐらいで崩れてきます。崩れてくることに意味があります。このお利口なところを残しでもっとしつけていけばと思ってしまうがちですが、いつまでもよい子でいるということは、それだけ心を開いていないということです。たとえ数日にしても、この状態を経験してしまった里親には、次の試しの時期に起こす、子どもの行動が理解できなくなることになるのですが……。

② 試しの時期

自分のできることを自分でしてくれていたお利口さんが、突然、いかに里親に手をかけさせようかとするように、今までできていたことを全て放棄してしまう状態になるところから「試しの時期」に突入します。

少しずつ新しい環境になじんでくると、ここが本当に自分にとって安心できる場所であり、里親たちが信頼できる人たちなのかを、確かめようとします。自分をどこまで受け入れてくれるのか？お利口さんでなくても、どんなに悪いことをしても、どんなにみっともないことをしても、この人たちは私を私として丸ごと引き受けてくれるのかと、問いかけているのです。だから、基本的にはすべて受け入れることが里親の役割になります。特に、養子縁組を希望している場合や、子どもが自立するまで長期間養育する場合は、当然のことです。ただ、短期養育や、実親や実親家庭への所属意識を強く持っている子供の場合には、受け入れてしまうと、里親との信頼が深まってしまい、やがてくる別離が新しい傷をつくることになるので、色々な対策が必要になります。

とりあえず、どんなことが起きるのかを説明しましょう。

ア まずは食事にかかわる問題が出てきます

見せかけの時期から、試しの時期に移行する途上に、ほとんどの子どもに過食という状態が始まります。10年ほど前までは、ほとんどの子どもがともかく大人の2～3人前を食べてしまい、どうかするとまだほしいと訴えるような過食でした。もちろん、今でもそういう子どももいます。2～3歳の子どもでも大人がびっくりするほど食べ、お腹もパンパン、口の中にもまだ飲み込めずに残っていても「もっと！」というのです。

最近、何でも食べるというより、何か気に入った食品だけを欲しがり、そればかりを毎日要求するという子供が増えています。例えば、味付けのりなどや、果物だけだったり、プリンやゼリーやヨーグルトというような

口当たりのよいものだけだったり、スナック菓子だけ、カレーライスだけ、うどんしか食べない、パンだけ、時には飴だけだったり、一日に乳酸飲料水を15本ぐらい飲んだりという具合です。多くの子どもがしばらく色々な食品にはまり、だいたい3日～1週間ぐらい同じ食品だけを食べるという状態になります。

これには、基本的に、食べたい時に、食べたいものを、食べたいだけ、食べさせてください。

あるいは、もっとよいことは子どもが期待しているであろう量の2倍から3倍をテーブルの上に置いていただけると、思いのほか食べなかったり、そういう状態が早く終わります。一番していただきたくない対応が、「ええ？まだ食べるの。もうお腹に入らないでしょ！お腹が痛くなったって知りませんかからね！ピーピーになったらどうするのよ！」などということです。「へえ！まだ食べられるの？すごいなあ！そんなにおいしかった！よかった。もっと食べていいよ。これも食べる？こっちは？」というように、気前よく与えていただけると、「そんなには食べられない！」と言ってくれたりするものです。

確かにいじましく見えたり、お腹をこわされては困るという心配から、つい拒否的な言葉かけをしたくなるのですが、それが一番いけません。欲しがって食べる時には、めったにお腹もこわさないものです。それよりも食べたいという欲求を十分に受け入れ、満たされた気持ちにさせることに意味があります。どれだけ自分の要求を聞き入れてくれるのか？と試し初めているのです。好きなようにさせてもらえた方が、早く卒業できるものです。

しかし、里親としては、ご飯やおかずをまんべんなく食べてほしいですし、味付けのりだけ食べられでも、それでよいわけではありませんから、とても心配です。せめてご飯一膳は食べてほしいと願うものです。それは当然なのですが、今は特別な時期なのです。身体によいことではなくても、いつまでも続くことではありませんから、どーんと受け入れてほしいのです。

こんな時に、「もったいない」とか「食事の仕方やお行儀」等をしつけようと思っても、うまくいきません。しつけは最初が肝心だからと思っておられるかもしれませんが、里親との信頼関係が出来上がらないと、里親の言うことが聞けません。こちらの要求を聞いてもらうためには、まず相手の要求を聞き入れましょう。

イ 里親から離れません

特に、年少の子どもの場合は、見せかけの時期には一人で遊んでいた時もあったのに、四六時中里親のあとを追います。常にスカートの端を持ってついてきます。あるいはずっと抱っこやおんぶを要求します。ある里親は、3歳の女兒で体重15キロをずっと抱いたまま、食事の支度も、洗濯もしなければなりません。抱いているというよりも、「私にせみの

ごとくくらくらいついていました」と表現していました。もちろんトイレの中までついてきます。洋式トイレに座った里親の膝の上に座っています。

これは、なかなかつらいことです。体力がいらいます。毎日のことで、一日中のことですから、里親のストレスは大変なものです。でも、なんとか拒否しないで受け入れてほしいのです。家事よりも、何よりも子どもの要求を聞き入れることに徹してほしいのです。凡帳面な里親は、いつものように掃除や洗濯ができないことがよりイライラを募らせることになります。でも、これもいつまでも続くことではありませんから、掃除も洗濯も食事の支度も放り出して、子どもと遊び、それを楽しんでくださることがとても大事です。

ウ 里親の嫌がることをします

里親が色々な要求を本当に受け止めてくれるのかを確かめるために、次々と特に里親が嫌だなあと思っていることをするようになります。ほとんどの子どもは、それも1歳代の子どもでも、しても良いことと悪いことを知っています。だから里親の顔を伺いながら、これをやると怒るだろう…というふうに挑発してきます。テーブルの上のコップを払いのけたり、食事の支度が整ったところを見計らって、それを全部放り出したりします。部屋中に牛乳やお米をばらまいた子どももいますし、一日中水道で水遊びをしてみせたり、大勢の人がいる中でひっくり返って泣いてみたりする場合があります。行動としては叱るべき行動なのですが、極端な話、子どもの命にかかわるようなことでなければ、叱らず受け止めてほしいのです。ただ、いけないことはいけないとやさしく注意だけしておきましょう。

子どもの中には叱られたら、それを受け入れられる子どももいます。賢くて、「この里親はよい子にしていけないと愛してくれないのだ」と思って、よい子を演じてしまうことになります。

いつもよい子にしていなければならなかった子どもほどつらいものはありません。そのつらさや恨みが、思春期になって爆発してしまいます。

それよりも、叱れば叱るほど反抗的になってしまう子どもの方が多く、その強情さに、叱る方も段々エスカレートしてしまっていて、気がつけば折檻死させてしまったということも、実際にはあるのです。心が傷ついた子どもはとてもかたくなになっています。

エ 怒りの爆発を受け止めましょう

時間の経過とともに、里親が自分を受け止めてくれると感じ始めると、多くの子どもが、噛みつく、殴る、蹴るなどの行為を里親に向けてきます。これはそれまでの生活の中で溜め込んできた怒りを出せる相手を見つけたから、思い切りぶつけてきているのです。確かに、本来里親が受けるべきゆえんではないのですが、子どもに怒りを溜め込ませておくことが子どもにとってとてもつらいことですから、受けましょう。特に愛着障害の重い子どもほど、怒りが大きいと思います。汚い言葉をあえて使ったり、偉そ

うに命令したりということもあるかもしれません。

噛まれるととても痛いですが、これは辛抱してください。殴るのも素手とはかぎりません。殴っても痛くないもの(ベットボトルやハリセン)を用意して、チャンバラごっこにするなど、できるだけ遊びに転化していただけると、楽しく怒りを爆発させられます。3歳の男児を引き受けた45歳の里親が毎日2時間以上プロレスごっこに付き合ってくださいました。本気で蹴ってきますし、たたかれます。疲れた子どもが昼寝に入ってやっと解放されるのですが、思わず涙がこぼれると訴えていました。でもよく頑張ってくださいだったので、案外早くに落ち着きました。

会社から帰宅して、毎日1時間以上馬になって座敷中を子どもに鞭打たれながら走ってくださった里親もいました。

里親の方が「いつまでこんなことが続くのだろう」と思っている間はなかなか終わりがこないものです。こちらからけしかけるように身体を使って遊んでくださると小さな子どもの怒りは消失していきます。

問題は大きな子どもの場合ですが、これは次項に譲りましょう。

オ 赤ちゃん返りが始まります

多くの子どもが、おんぶや抱っこだけにとどまらず、「おむつをしてほしい」と訴えたり、哺乳瓶でミルクやジュースを飲みたがったり、しっかりおしゃべりができていた子どもが「ああ……」とか「う……う……」というような喃語で話したり、歩かなくなるとハイハイをし始めたりします。

おむつは小学校の低学年ぐらいまでの子どもは要求します。場合によってはもっと大きくても要求する場合があります。小学校の2年生の娘を引き受けた里親は、添い寝をしていると一晩中里親のおっぱいをまさぐられていました。おねしょも、寝ている間だけ赤ちゃんになっていると考えるといい場合もあります。ですから、こちらから「おむつしようか……」ともちかけるとすごく喜んで応じてくれることがあります。

どこまで退行するのかは、その子どもの親との関わり方がどうであったかによって違います。2歳まで母親にそれなりに育てられていた3歳の男児は、おむつを要求しましたが、その用意がなかったため、おむつをする身振りをしてやっただけで、それ以上要求してこなかったということがありました。

それぞれの子どもが、本来親から受けるべき愛情がどこで途絶えたのかを記憶しているのではないかと思えるほど、その必要なところからの要求を里親に求めてきます。あるいはどこまでだったかを探るために一挙に赤ちゃんになって、親からしてもらったように里親がしてくれることで納得して、その続きを要求していると言ってもいいのかもしれませんが。

しかし、子どもは一日中赤ちゃんをしているわけでもないのです。一日の中で、赤ちゃんになってしつこく甘えてきていたのに、少し場面が変わると、年齢以上にませたことを言うてみたり、2歳や3歳と思えないような大人びた態度を取ることもあります。基本的には赤ちゃんになっている

時には、本当の赤ちゃんのように扱ってやるのが、とても大事なことです。

力 子どもにだって年齢相応のプライドがあります

4歳の子どもには4歳の、5歳の子どもには5歳のプライドがあります。だからそれまでの様々な試し行動を通して、赤ちゃんになっても大丈夫なのかを探っています。プライドをかなぐり捨てて要求したのに、それが拒否されると、子どもでもとてもつらいのです。中には秘密にしてねと頼んだり、里親が嫌がることを承知で、人前でおっぱいをまさぐってきたりする場合があります。あるいは「させてほしい」ということが出せないでいる場合に、こちらから赤ちゃんにしてやるよう誘い掛けが必要な場合がありますし、家庭訪問に来たワーカーが、「そんなに我慢しなくてもいいんだよ……」と言ったら、それをきっかけにドドッと退行してきた子どももいます。

これも、「いつまでこんなことに付き合うのよ……」と思っていると、長く続いてしまいますし、赤ちゃんであることを楽しんでやれると、案外気がつくと終わってしまっていたということになります。

③信頼関係が成立するということ

試しの期間は子どもを可愛く思えませんし、何でこんな子どもに振り回されるのか、夫婦でも意見が食い違い、夫婦げんかが絶えなかったり、叱りたくて堪らなくなったりヒステリーを起こしてしまうこともあります。

子どもの年齢や、里親の受容度によって、半年から1年という期間だといってもどの程度で落ち着いてくるのかわかりませんが、ひたすら積極的に受け入れていると、一つひとつ終わっていくのがわかるようになります。それがわかると、里親の方もゆったりと「次は何を出してくるの……？」と思えますし、とても楽になります。そのうち、里親から「こうしてほしいよ……」とか、「こうしょうね」ということに素直に応じてくれるようになると、可愛く思えてきます。子どもの表情や甘え方に、子どもらしさが出てきて、気がつくとも毎日が穏やかに過ぎるようになります。

ただ、ここで難しいのは、実親との記憶が子どもにしっかりあって、必ず実親に引き取られる子どもの場合です。すべてを受け入れてしまいますと、里親との関係が実親より深くなってしまいます。でも子どもを預けないといけない状況にあった親子関係には子どもにとっても不足なことがいっぱいありますから、子どもが求めてくるものを拒否することはできません。抱きしめたり、赤ちゃん返りを受けている時に、できるだけ実親の話をして子どもに実親をイメージさせてやるような配慮が必要です。また、実親との情緒的な関係ができている子どもの場合は、これほど極端なこともないでしょうし、ここにいる間だけのことだという枠組みをしっかり提示して、あまり極端な行為については受け入れられないと説明した方がよい場合もあるでしょう。

問題は虐待などで、かなり重い愛着障害の子どもです。その子どもたちは、まず叱られるように、殴られるように仕向けてくるでしょうから、決して、この挑発に乗らないように気をつけなければなりません。そういう状態が1年以上続くかもしれません。それでも殴られないとわかれば、今度は凄まじい退行が起きる可能性があります。

(2) 子どもの行動上の問題の理解

子どもを引き取った当初には、子どもの心の傷を癒す努力が必要です。そのために思いっきり傷の膿を出し切らせることが、早い回復につながります。それで、子どもがどんなことをしても、叱らず、無条件に子どもそのものを丸ごと引き受けてほしいのです。また、生まれたばかりの子どもが泣きさえすれば、いつも同じ人から必要な欲求を満たされるということの繰り返しとその人への信頼を積み上げていくことになるように、その泣きさえすれば無条件に受け入れてもらえる0歳児期を体験させることが、情緒の安定に必要な関わりなのです。

しかし、どれほど努力しでも、里親が関われなかった期間のすべてを取り戻せるわけではありません。特に、愛着障害が重い子どもは、里親にとっていつまでも心配な子どもです。次々と問題を起こしてくるかもしれません。ただ、子どもの行動には、それぞれに子どもからのメッセージが含まれています。それをどう読み取って、どう応えていくかが里親の役割になります。

子どもたちによく起きる行動上の問題について考えてみましょう。

① 盗みと嘘

盗みには色々な意味が含まれています。家の中のお金を盗んで、友達におごったり、物を買って振る舞ったりする子どもがよくいます。これは、友人にワイロを配って関心を引きたいということです。友達に遊んでもらうためであったり、注目をしてほしかったりということです。

盗む金額は、有ったお金によります。100円玉しかなければそれを、1万円札があれば、それを持っていくことになります。「100円はまだ許せるけれど、1万円なんて。」というのは大人の感覚です。それに見つかった時には「盗っていない」と嘘をいいます。盗んだ証拠がそろっていても、最後の最後まで割合平気な顔をして嘘をつきます。理由を聞いても「欲しかったから……」としか言いません。最初から盗むことは悪いことだと知っていて、でも盗むしかない子どもにとって、正直に言えるものではありません。よく大人は「正直に言えば許してやる」と言いますが、正直に言ったからとて、許されることではないことを子どもの方がよく知っています。盗みと嘘とはワンセットです。

寂しさを物で埋めるための盗み、大人の気を引くための盗み、盗むことに憑かれたような盗み、どれも「盗みは悪いこと」だからしてはいけない

という対応では、どんなに叱っても、簡単に収まりません。遊び心でやってしまった万引きでさえも、里親が警察や学校や店にどう対応してくれるかで、里親への信頼を深めることにもなれば、里親への不信を募らせることにもなります。子どもの心の中で何が起きているのかがわからなくても、子どもの心に添ってやろうとする思いやりが必要になります。

嘘にも、幼い子どもの作り話から言い訳の嘘や現実逃避のための嘘等、色々な意味がありますが、どうしても大人は子どもの嘘に、神経質になります。嘘を一度もつかなかったという大人はいないと思うのですが……。

ただ、子どもを信じてやりたいと思う時があれば、だまされてやることも必要ですし、だまされてやりながら「バレていたのか……」と気づかせることも必要です。

② 怒り

委託時の年齢が高い場合には、怒りを長く心の中に閉じこめていたわけですから、なかなか出せない上に、出せるようになると凄まじいものになります。小学生ぐらいになると、まず言葉で出してきました。汚い言葉で怒鳴る、すごむというようなこともあります。暴れても力が強いですから、大人でも太刀打ちできないこともあります。暴れる子どもをはがい締めにもしていないと、何をやりだすかわかりません。家で締めつけると、学校で出します。ちょっと気に入らないことがあると、それが導火線になって、過去にため込んだ怒りが爆発することになります。ある男の子は「今の小さな怒りが、過去の大きな怒りにショートする。そしたらわけがわからなくなる……」と表現しました。周りの人間には、なぜこの程度のことですごく怒るのか理解できないので、子どもが異常に見えてしまいます。引き取った当初にその怒りが出し切れればいいのです。でも学校に通う子どもの場合は、怒りを出し切れないうまま、外の世界との付き合いが始まりますから、あちらこちらから被害が出てきて、その対応に追われることにもなります。心配で、つい出かける前に注意したことが子どもの機嫌を損なうこともあります。

そうすると、爆弾を抱えて登校させることになります。できるだけ家では受け入れて、機嫌よく送り出すことも必要になります。それでもいつどんなことでキレるかもしれません。それに怒りを貯めた子どもは自分には甘く他人には厳しい傾向がありますから、級友からはつまはじきにされやすく、それがまた怒りを呼ぶということにもなります。ガラスを割ったり、近くに何か手ごろなものがあればそれを振り回す。事が終わって冷静になれば、本人が自分のしてしまったことにびっくりします。さりとて、率直に詫びることもできず「警察でもどこへでも突き出せよ……」と、開き直ってしまったりします。里親にとっては対外的に責任を問われますのでとてもつらいことにはなりますが、児童相談所や学校カウンセラーや担任とよく連絡を取りながら、できるだけ甘えを受け入れながら、過去のつらい出来事が話せるような援助を、時間をかけてしなければなりません。

③ 浪費

愛情に飢えた子どもはそれを物で埋めようとする傾向があります。幼児でさえ、物を買うという経験をすると、とめどもなく欲しがります。委託当初に、思い切り欲しがるだけ与えてくださるとそれも収まるのですが、金額がかさむものですから、つい制止しがちになります。同じような玩具を毎日買わないと、すねる、むくれるという状態になったりします。どうしても大人は「もったいない」と思いますし、「浪費癖でもつけば困る」と思います。

しかし買い物の時に買ってもらえた喜びを共に喜んでやれば、結構満足し、それで済んでしまうものなのです。しかし、買うたびに「もうこれだけですよ」とか「昨日約束したじゃないの……」とか、文句をいいながら子どもの執拗さに負けて買ってやるというやり方が、一番浪費癖にさせてしまう対応なのです。

しつこい子どもの要求に付き合いきれずに、拒否的な言葉を浴びせかけながら色々と御託を並べてやっとなんか買ってやり、「買ってやった」と思っても、それでは子どもは少しもうれしくありません。そんな時の子どもの関心は、「これを買ってくれるかどうか」だけなのです。だから、買ってもらった物を大事にしません。それがまた大人の神経を逆なでします。里親は「これだけしてやっているのに……」と思っているのですが、子どもの方はいつも「満たされない」気持ちでイライラしているものです。

子どもは欲しいという気持ちを受け入れてもらえるとうれしいのです。まして、今まで欲しい物が欲しいように与えられていなかったはずですから、欲しいという気持ちを良く理解し、受け入れ、その上でどれにするか迷う子どもに付き合っただけだと、買ってもらった喜びが大きくなるのです。

④ 落ち着きがない

親の身勝手な行動や気持ちに振り回されてきた子どもは、落ち着きがありません。一見おとなしそうに遊んでいても、頭は目まぐるしく回転させています。そんな中では、物事に集中するという事などとてもできません。脈絡のない指示がいつどのように飛んでくるのかわからない状態で育てられたら、おどおどしているしかないでしょう。人のしていることばかりが気になって、自分のすべきことが何もできていないことがよくあります。学校でもそうです。じっと椅子に座ってられず、動き回って他人にちょっかいを出したり、忘れ物も多いですし、物をよくなくしてきます。それもどこで落としたのか、どこへ忘れてきたのか覚えていません。いくら注意されても、その注意に気持ちが集中しませんから、改善されません。

最近では、ADHDと診断される子どもも増えてきました。ただ、本当に脳の障害なのか、それまでの環境的要因によるものなのかの診断はなかなか難しいものです。まして、新しい刺激に反応しやすい気質の子どももいるのです。特に低学年の間は、学校の参観日などはまともに顔を上げてい

られないと、よく里親はいいます。里親が学校に来てくれるだけで、もう興奮状態ですし、じっとしていない子どもに、周りのお母さんの拒否的な反応を感じると、顔が真っ赤になって、教室からいなくなりたいと思うことでしょう。

しかし、時間はかかりますが、だんだんと落ち着いてきます。学校の先生にも理解してもらえるように、子どものそれまでの環境について説明することも必要かもしれません。

⑤意欲がない

集団の中にうずもれて、目立たず、指示されるままに生活してきた子どもほど、里親にとって、難しいものはありません。最初は、指示にも素直に従いますし、ベタベタ甘えてくることはありませんので、とても扱いやすい子どもだと思ってしまいます。しかしながら、それ以上になかなか関係が深まりません。そのうち、指示に従ってくれると思っていたのは、基本的な生活部分のみで、あとは壁にしゃべっているように感じられるくらい、反応がありません。抱いても、身体が固く、緊張していて、どうかすると一刻も早く降りたい様子です。子どもらしい笑顔や、おしゃべりがなく、あらゆることに意欲が感じられません。半年、1年経過しでも、それでも少し慣れてきたかなあと思えるのは、自分のしたいようにしないだけで、あまり大きな変化が感じられないのです。言い聞かせても、注意しても、どこまで聞いているのかわからず、里親の方がイライラしてきます。

愛されることにも、要求することにも、すっかりあきらめてしまっているのです。できるところをしっかりとほめて、身体的な接触をできるだけ多く持つように心がけ、時間をかけて、関わられることを快く感じてもらえるように仕向けていくしかありません。

⑥退行

試しの時期に、かなりしっかりと赤ちゃん返りを引き受けたつもりでも、何度も、繰り返して甘えてくることがあります。年齢もだんだん大きくなりますので、里親にとって心理的にも、肉体的にも負担に思えてくるでしょう。

人間はいくつになっても、赤ちゃんのように、あるいは幼子のように誰かに甘えてみたくなるものです。特に、ストレスの多い現代社会にあっては、大人でもそうです。夫や妻や恋人の前では決して他人には見せられないような態度をとることさえあります。

子どもであればなおさらで、特に学校への入学や転校など、今までにない緊張や頑張りを強いられてくると、頑張らなくてもいい年齢に自分を退行させることで、回遊したいと思っているのです。そんな時には、「どうしたの。大きくなって……、重たいわよ……、やめてよ……」なんていわないで、「よしよし……」と思いきり引き受けてくださる方が、子どもは「明日もまた頑張ってこよう……」と思うものです。子どもたちも相当に

ストレスに侵されています。

お稽古事や、塾通いに追われて、子どもらしく体を使って、集団で、思い切りエネルギーを発散させながら遊ぶという機会が少なくなっています。大人は子どものために良かれと思ってやらせていますが、なかなか子どもにとってはつらい毎日です。あるいは自分からしたくて行ったとしても、常に評価される場所に身を置いているわけですから、イライラしてすねたりむくれたり、反抗的になりやすい状況にあります。

子どもは、確かに少し手綱をゆるめると調子に乗ってくるころがあって、どこまで許せばいいのか難しいものです。でも、いつもと違って甘えてくる時には、外で何かがまんしなければならぬことがあったはずで、まして、それまでの生活の中で、耐えてきた子どもたちですから、甘えられるという体験は非常に魅力的なのです。受ける時にはしっかりと十分に受けてやりましょう。甘えてきてくれることを親がうれしがったり、楽しんだりしてくれると、短時間でも満足があります。これも嫌々仕方なく受けるというのでは、せっかくしてもらってもあまり満足がないので、ずるずると「もうちょっと……」なんてことになります。

ただし、小学校の高学年あるいは中学生や高校生になると、特に異性の親子関係では、配慮がいらいます。基本的に乳幼児期の親子関係はとてもエロチックなものです。抱いたり、添ったり、添い寝したりすることは、快感を感じることで、ある年齢以上の子どもにとっても、無意識に性的な反応が起きたりします。大人同士ならかえって許されることが、大人と子どもとの関係の中だから許されないこともあるのです。でも、甘えたいという感情は素直に受けてやらないといけません。赤ちゃん言葉を使ってみたり、さり気ない身体接触、すなわち肩をたたいたり、背中をさすってやったり、手を握ってやったり、その上で甘えたい状況を言葉で受けてやることなどになるのでしょうか。工夫をしてください。

また、性的虐待を受けた子どもの場合にも、体を触るということは十分な配慮が必要になります。

(3) 養育に難しさを感じたとき

この章では、関わりの困難な子どもに対しての養育方法について述べていますが、子どもの養育の難しさが頭の中で、解っていても、里親が心身ともに疲れ果ててしまったりする場合があります。

また、子どもが成長してきて、今まで考えられなかった問題行動が出てきたり、子どもが里親に心を閉ざしてしまい、里親が悩んでしまう場合も出てくるかもしれません。

その様なときは、次の事を参考にしてください。

① レスパイト・ケア

委託児童を養育している里親家庭で、一時的な休息のための援助が必要

になった場合は、乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設又は里親家庭を活用し、年7日以内に限りレスパイト・ケアを受けることが可能です。

レスパイト・ケアを希望する場合は、管轄の児童相談所に申請することになります。

レスパイト・ケアを活用する里親の費用はかかりません。レスパイト・ケアを実施する施設又は里親に対しては、別紙35頁のと通りの費用が支払われます。

詳しくは、児童相談所に相談してください。

②児童相談所での再判定

委託児童の養育に関して難しさを感じ、どうしていいかわからなくなった場合は、児童相談所の担当者に相談してみるとよいでしょう。児童相談所担当者に委託児童の話聞いてもらったり、心理判定をしてもらうと子どもの心情が理解しやすくなります。

また、委託児童の気持ちを時間をかけて理解することが必要な場合は、児童相談所の一時保護を利用することも一つの方法です。